

かはるゝ出てまろばすなり是をばまを射るといふまた大和國吉野郡上市村の人の物語にも大和にてはまを射る事右の如し大和にてはままころを射るといふはまころとはまをころばすといふことなるべし土佐の人大和の人のいふ所同じ趣なり然ればまは的の名なり破魔にはあらずかし

〔嬉遊笑覽雜四〕

伎

はま弓ははまと弓と二物なり此ことは先に著し、雜考の内にいへり舊說破魔

の字義によりていふは非なりはまは藁にて造るそれを小弓にて射る戲は今も田舎にありといへり略○中はま弓はま矢といへども弓はまといふことは物に見えず應筑波暖な日はくるふ

童濱弓を一入下手や削るらん又佐夜中山集付句みつばよつば作る若殿のはま矢かな西鶴が

世の人心に五月の節句に甲正月に破魔弓進して祝義とる事もわきまへなく乳母の奉公になれざるものぞかし贈る乳母よりかいる物醒醉笑いはひすぐるもの、條そうりやうの

子六歳なりこ弓にこ矢をと、のへもたせけるが元日の朝矢を一つはなし俵にいつけ云々日本歳時記の畫にも正月こどもの小弓いる處ありはま弓今はた、祝儀の物たれども昔は射ら

る、やうに造りて賣し也寛文七年十一月朔日町觸はま弓結構に致さず射られ候様可仕候但人形作り物一切可爲無用事類柑子いなつかの灯の條破魔弓の矢筒とゞろはげたるを火吹と

し畫けるま、の名を松鶴とよぶ云々これ畫やうはかはらねども吹竹に用ひしは今の如く紙のはりぬきにはあらず

〔籠の花上〕破魔弓

今正月わらべのもてあそぶはま弓といへるものは世諺問答卷の上曰孝徳天皇の御宇に正月に弓をいさしむ凡まとは蚩尤の眼と名付てこれをいたましむるなり滑稽雜談卷の一日或説る濱弓は蚩尤が眼を射破る義なれば實は破目弓なるべし通今は世にたえてはまを射るわざ